令和４・５年期　神奈川県青少年問題協議会　第４回企画調整部会　議事録

日時　令和５年２月９日（木）11 時 10 分～12 時 10 分
開催方法　Ｚｏｏｍによる会議

○青少年課長

本日はお忙しい中、引き続きご出席いただき、ありがとうございます。

青少年課長の長島でございます。

部会の出席については、９名中８名ご出席ということで、定足数は満たしております。

少し時間を押しておりますが、引き続きよろしくお願いします。では、会議の進行については、長谷川部会長にお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

○長谷川部会長

協議会に引き続き、企画調整部会第４回目になります、どうぞよろしくお願いいたします。さきほど、白熱した議論が協議会でございましたので、時間が押してきました。ご協力のほどよろしくお願いいたします。

では早速始めて参りたいと思います。

議題１　令和４・５年期の協議テーマについて、改めて事務局の方からご説明お願いします。

○企画グループリーダー

（資料５に基づき、説明）

○長谷川部会長

ご説明ありがとうございます。

今のご説明についてご質問等ございますか。

また、５月の発表者についてはメール等でご依頼があるので、適切な方がいたら、ご紹介いただきたいと思います。

それでは、委員からの発表ということですが、1 人 10 分から 15 分位で、蟇田委員、そして長谷川の順番で少しプレゼンをさせていただきたいと思います。

その後、質問・意見交換の時間を、準備しております。それでは蟇田委員よろしくお願いします。

○蟇田委員

画面を共有します。私は現場の支援に入っておりますし、現場で利用者といろいろな話をする中で生まれた支援スタイルを今日は皆様にお伝えしたいと思っております。

「働き方拡張型支援とオンライン支援について」です。そもそも、私が所属している団体は立川にある認定ＮＰＯ法人育て上げネットで、若者と社会を繋ぐための活動をしています。ただ、若者と社会を繋げるために、待っていては、なかなか若者が来ない。特に今課題になっているひきこもりの若者というのは、どうしても支援という言葉から逃げ腰で、どちらかというと背を向けている状態です。

元ひきこもりだった利用者にいろいろな話を聞くと、「こういうことがいいのではないか」「こう

いうきっかけがあれば来るよ」という話があり、新たに取り組んでいるのが、働き方拡張型支援です。

初めて聞いた方が多いと思います。元ひきこもっていた若者に支援する時、「できることからやってみよう」、「あなたの好きなこと、得意なことは何？」ということを私達は聴いています。そうすると。受動的ではなく、主体的に動けるようになったと本人達が教えてくれました。そこで、自分の「好き」をいかしながら、小さなステップを踏みつつ、そして、それが就労できる能力や自信を育むという支援すると良いのではないかと、試行錯誤で始めました。

2019 年から始めている取組みですが、世の中は新型コロナウイルス影響で、本当に働き方がいろいろ変わり、リモートワークが急速に発展したという背景もあります。
それから、働き方改革で、企業や役所も含めて副業が解禁になったりしてきて、その副業がオンライン主流になってきています。

そのような状況で、私たち 2019 年の就労支援の現場はどうだったか。コロナ禍だと通所型の私たちは、閉所していたので利用者と関われない状態がありました。対面型支援が一切できなくなりました。

就労支援の分野も、働くことを、リアルから、オンラインへ、移行しているので、支援現場もオンライン化できないか試行錯誤していました。利用者たちから、「趣味や好きなことを利用する場づくりをしてから、そこから支援したらどうですか」と声が上がったのです。
この「好き」と「趣味」を利用するオンラインプラットフォームは若者達のニーズがあるかどうか、私達は、利用者にアンケートを取りました。134 名の回答があり、驚いたことに、「趣味・興味を生かして収入を得ることに興味がありますか」という質問については、６割が興味がある、そして、１割がすでに挑戦しています、という回答でした。これは本当に私たちも驚きました。

なぜならば、私たちのところにくる多くの元ひきこもっていた無業の若者たちは、働くことに対してはなかなか前向きに考えられない、働くことだけではなく、何事においても、ネガティブで消極的で自己肯定感が低い若者が、このアンケートで、６割が「やりたい」という回答で、本当にびっくりしました。

自由記述の回答に「やってみたいこと、やっていることはどんなことですか」と質問したら、多くの利用者から「ものづくり」の声があがりました。「自分が何か作ったことを、オンライン上で販売をしてみたい。」「動画を制作してそれを人様に見せられるような編集をして、オンラインにアップしたい。」あとは、「写真が趣味だから、それをアップしたい。」投資や、ユーチューバーという方もいました。他には、「自分の不用品や古本やまんが本などを、ネットのフリーマーケットで売ってみたいけど、何か怖くてできない」とか、また、ｅスポーツや「音楽を作成して藤井風くんみたいになりたい」とか、「イラストを作成して、みんなに見てもらいたい。」など。

どちらかというと、ネガティブで消極的な利用者の声を参考に、できそうなことをプログラムとして採用していきました。ちょうどコロナの始まりもありますし、2019 年にＪＰモルガンの助成事業の応援をいただきましたので、趣味と興味を生かした仕事に関するプログラムを作成しようということから始まりました。

このプログラムの対象は、10 代から 40 代後半、好きなことを生かして、いろいろなプログラムでモチベーションを上げていくもの。私たちは「働き方拡張型支援」と呼んでいます。

2019 年から 2021 年までの２年間、まず実験的に行い、オンラインで参加することが可能なので、

全国から 1,800 名が参加いただきました。オンライン上で、受発注ができるようなクラウドワークスを体験してみたいという声が上がったら、それをプログラムにする。あとは、自分がハンドメイドをオンラインのサイトで売る、それはメルカリで売ってみたいということでしたが、私たち支援者もメルカリでの売り方がわからないため、メルカリ講座を開催しました。
参加している若者と、私たち支援者も一緒に学びながら一緒にメルカリで売ることを経験し、伴走しながら学びながら、何か結果を出すという講座スタイルもできました。
　それから、絵を書くことが得意な方、イラストを仕事にしたいと思われる方も多いのですが、イラストで仕事に就くのはとても大変なことだと腰がひけている利用者も多く、イラストレーターさんに来ていただいて、現実はどのようなものかということを知っていただきました。
あと、ハンドメイド作家さんアクセサリーを作っている方ですが、アクセサリーを販売するサイトに出品して、売るまでのプロセスやノウハウを教えてくれる講座も、若者からのリクエストで開催いたしました。
　写真の撮り方や、キャッチーなコピーの方法、どのタイミングで出すと売れやすいかなど、オンライン上で体験していただいて、そして、実際に自分たちで、物を売る。オンラインに一緒にアップするだけで、イイネがついて、そして、販売できました。
　「1,000 円、お金が入ってきた、稼げた」、「自分の好きなこと趣味なことって、社会の人が認めてくれるものなんだ。」と。だけどこれは、一生の仕事ではないなという、気づきもありました。趣味を生かし社会につながり、社会で評価してもらうと、次のフェーズに移行していきます。この働き方拡張型支援は、次の一歩、具体的にキャリアにつなげていくということに成果があると、感じております。

　試行錯誤してはじめた、働き方拡張型支援、2021 年から「アトオシオンライン」としてプログラムを開始しています。
　この絵をご覧いただくと、本当に寝ながらでもできる、気軽に家の中で、働く相談ができることを強調しているのですが、オンラインで相談をする、講座にも参加することができる。就職活動のサポートを受けられる。そして、オンライン上で、いろいろなチャレンジをして、自分を試す場ができる。
　こちらは様々なプログラムをいろいろ参加後、振り返りのオンライン面談を個別で行い、その一人一人がどういうものを感じているかということを、聴きながらＰＤＣＡをまわしながら進めています。
「アトオシオンライン」は、2022 年の４月から 12 月までの参加者は、延べ人数で 197 名です。
具体的にどんなことをしているか、もう一度紹介しますと、左側の上から２番目の工作広場というのは、「手先がちょっとみんなより器用だと思うので、何か作ることで、オンライン上で売ることだったり披露したりすることをしたい」という声からできたプログラムです。立川に集まることもでき、なおかつ全国からオンラインでも参加できる、ハイブリッド形式で時間を決めて、それぞれみんな同じことをせずに、好きなことをその時間内にやっていただいて、絵を書いたり、作曲をしている子もいます。アクセサリーを作ったり、ものづくりや、いろいろと工作をしているという、そのような感じでみんな自由に参加していただいています。自由な状況で期間を共にし時間ごとに、参加者一人一人から経過を聴き、最後に成果発表、途中の子は途中で、それぞれその作品を見せてもらうことをしています。

そうすると、オンライン上で、チャットでみんながイイネのマークをしてくれるなど、賞賛をあび承認をうける経験を積んでもらっています。この工作広場参加後、振り返り面談をすると、好きなことや興味があることだと「みんなから認めてもらい嬉しかった！満足しました」という、意見がとても多かったのです。

それ以外にも、ＩＴスキルのための講座も若者の意見から開催することができました。例えば、プログラミング、そして、実際に働いているプログラマーの方々と話す機会を作り、興味が深まり「働いてみたい」と気持ちが動くこともありました。

そして、講座の参加方法ですが、カメラをオンでもオフでも大丈夫、マイクもオンでもオフでも大丈夫。あなたの参加したいスタイルで参加してください。強制はしないことで行っています。

また、相談に関しても、カメラはオフで大丈夫から始めると、だんだんと慣れてきて顔を出すようになってきますし、実は、直接立川の場所にも行ってみたいと希望も出てきています。最初は、顔も出さない、声も出さない子たちがどんどん変わっていきました。

一番びっくりしたのは、昼夜逆転している、ひきこもっていた若者から提案でした。上２番目、左から２番目の「朝活」という黄色の文字がありますが、これは、ひきこもって昼夜逆転している子が、生活リズムを整えたいと「朝活を」提案してくれたのです。「朝の 30 分をみんなで好きなことをテーマに語り合いたい」から始めたのです。たった 1 人の意見で始めてみました、しかし、毎回 10 人以上参加してくれています。それぞれ顔を出す・出さない、マイクをオフ、チャットだけなど、参加方法はいろいろです。例えばテーマが「ディズニーランド」、このテーマは、好きな方が多くて、普段何もしゃべれない子が、いろんなディズニーの豆知識を披露して、みんなから尊敬されたり、賞賛を浴びたり照れながらおしゃべりしています。

他にもオンライン支援の事例がありますのでご紹介します。例えばＡさん、ひきこもり期間が 10 年以上ありました。外に出ることが怖くてしょうがない子。でも、アトオシオンラインの支援であれば、外に出ず、出かける準備もせずにそのままの状態で参加できる。要は、その子から聞いたのですが、対面型の支援だと、アウェーなところに自分が乗り込んでいくから、「面倒くさいし怖いです」という意見がありました。でもオンラインだと、ホームグラウンドから参加できるから、すごく気持ちが、リラックスして、そういった環境はありがたかった、そうです。

オンラインで面談と、いろんな講座を組み合わせすることで、興味のあるデジタルスキルを取得し、趣味であるイラストを、オンライン上で、販売をすることができたのです。ひきこもって 10 年以上でしたが、このデジタルスキルを使って販売することで、皆さんから「イイネ」をもらい、実際 1,000 円位のものが売れていくという経験ができたのです。何と、繋がってから半年の支援で、倉庫内の仕事をみつけアルバイトを始めることができたというケースですほとんど家から出られなかったのに、今では定期的に働きに出ています。

時間がないので、ＢさんＣさんは割愛させていただきますが、Ａさんは、このイラストを誰でも無料でダウンロードして自分の資料の素材にできる「イラストＡ．Ｃ」に、出すことで、127 回もダウンロードされました。そういう経験で認欲求が高まりました。あとは、ＬＩＮＥのスタンプを販売するということも、少しずつ売れていくことで、自分が社会に認められたと実感し、就職活動に踏み出しました。

若者たちが、従来型のキャリア相談や講座セミナー、面接対策や志望動機、職場体験など、いきなり入口が働くというものにはハードルの高さを感じている方は少なくありません。もちろん従来型の対面の支援が、最適である方もいます。ただし、半数以上の若者がやはり、尻込みしていて、

でも、関心があることや好きなことだったら、そういう支援機関に繋がってみたいなと思っています。ハードルが低くなり、自分の好きや興味、学びたいことを、スタートする入口を目的として、始めること。

好きなことのためには、例えば写真を撮るのが好きだったら、「来週写真撮ってきてね。そしたら、サイトに載せること一緒にやってみようか」と言うと、今まで家にいた子が、外に出て、景色の写真を撮り、行動が広がっていく。行動の動機付けがしやすくなりました。

そして、繰り返し実感を積み重ねて、成功体験を増やしていくと、自己肯定感が低い方でも仕事に対して不安とか恐怖心が減少していくことは、面談を通じて見えてきたことです。「好きなこと」から、始めたことで、就労に向けての行動がとれるようになりました。みんな、一生好きなことを仕事にしようとは、思ってはいません。社会から自分の好きなことを認めてもらうと、安心感が生まれて、自信がつき、勢いで従来型の支援にも自然に参加するようになりました。志望動機をどうするか、面談対策どうするかと、社会に繋がっていくということを、チャレンジしています。

今まで支援機関に来なかったようなタイプの若者が、参加したケースが多く、その理由は、「好きなことや興味のあることを学べるから参加しました」と声をたくさん聴くことができました。

今まで出会えなかった、より多くの若者が社会的な繋がりを持つことができて活躍できる人材になるためには、このような働き方拡張型支援は、いきなり社会につながるのではなく、まずは慣らしのストレッチをしてから、本来のキャリアの支援に繋げていくという取り組みです。現場では社会参加に不安を抱えている若者への、これからの支援の取り組みとして期待しています。

受動的な支援ではなく、若者達が自分らしく巣立つために自分の好きなことで主体的に動き出すことを応援していきたいと思います。

私たちの活動を最後まで聴いていただきありがとうございました。皆様、ご清聴ありがとうございました。

○長谷川部会長

蟇田委員ありがとうございました。とても丁寧に実践をされていることがよく伝わって参りました。

○長谷川部会長

それでは私の方は十分ぐらいで、お話をさせていただきたいと思います。

画面共有をさせてください。

私の方は、「コロナ禍の経験から構想するひきこもり支援」と、少し大ぶろしきですが、少し考えていました。そして自由性、多様性、利便性、合理性、効果性という要素を大切にしながら、最適かつ、支援方法といったものをどうやって作っていくのかということを、お話したいと思います。

まず資料１枚目ですけども、左側からひきこもり状態。まだこれは個人の問題という、個人レベルのまだ段階です。そこに右の方に移っていきますと、赤字で書いてありますが、ひきこもり問題をどう理解するかということで、やはり社会的孤立状態です。そこに適切な支援がなかったり、放置されると、社会的排除問題の一つになる。ご本人及び家族だけで解決をするという個人的な問題ではないのです。そのような認識が大切なのではないかということです。

次のシートは、これも左側から順番に来て、ひきこもり状態そのものが手前の縦長の黄色の部分があり、やはり社会恐怖や対人恐怖には失敗に基づいた、失敗による傷つき経験みたいなものがあり、そこでひきこもりの状態になったということがあります。

要するに、その逸脱やドロップアウトということだと、非常にネガティブな印象がついてしまうのですが、そうではないのだ、というふうにとらえたいと思うのです。

しかしそのひきこもり状態になると、右側のブルーのところですが、なかなかそこからその状態を解消することが難しいという問題に、ご本人もご家族も直面していきます。特にこの赤いところですが、国がガイドラインでひきこもりを定義していますが、今やひきこもり概念にするのは自己命名概念になりつつあるのではないかと思っています。

そういう意味で言うと、ひきこもりの概念がとても多義性を帯びてきてしまっていて、ひきこもりといっても非常に幅広い方々がいらっしゃって、その方々全員に対して適切な支援といったものは、非常に難しい状況になっているのではないかと思っています。そう考えた時に、その人という１人の人、個別化視点と呼んでおりますが、個別化視点に立って支援を考えていくことが大事ではないかと考えているところです。

また、今申し上げたことと、また違った図で書いてありますが、今までは社会からドロップアウトすることは、本人の自己責任において家族責任において、また社会に戻るといったことが求められていた。しかしそうではなく、社会が変わるということの中で、本人のひきこもり状態が軽減緩和されていくことを目指す。そういうことが大事な時代を迎えていると思っています。

要するに、社会的包摂、ひきこもりといった問題は、いかにご本人の意思を尊重しながら、ご本人の状態を鑑みながら、合意形成をしながら、社会的な包摂の道を歩むということなんだろうと思います。そういう意味で先ほど蟇田委員の実践例はとてもユニークで先進的なものだというふうに承りました。

次に、このコロナ禍の中で、価値感或いは生活様式、様々なことが大きく変化しましたが、それをコロナ禍とひきこもりのご本人ということで作ったシートです。

Ａの人たちは緩やかな社会参加ができていた方たちです。オンラインではなく、対面方式です。その人達はやはり利用施設の閉止・中断や、或いは就労や就労訓練が中断するなど、またその結果、緩やかに出られていたのに出られなくなるということで、ご本人も親御さんも、心配や焦りが募ってくる、ということがありました。

そこから言えることがこの矢印三つかけましたけども、社会参加の制限と停滞といったことが現実に起こり、その結果、ご本人家族の不安や焦りが強まり、そして、ご本人が社会参加意欲が減退していく。そういうことが起きているのではないかと見ています。

Ｂは、あまり注目されてきておりませんが、Ａはかなりどうしたらいいのか、ここに対してオンラインでの参加、参画ができる方法を、講じるということが生まれるのですが、Ｂの人たちはそもそも外出をしていないなど、何らかの形の社会参画が十分できていない人たちなのですが、その人たちはコロナ禍の前もコロナになっていても、生活上、意識上あまり変化がない。ところが、コロナ禍前よりも親の理解が促進するということもあります。それをまた次のシートで説明します。

また、コロナ禍前より、親からのアプローチの厳しさが増したこの二つ目と三つ目は、対極的なものですが、家族理解が促進したグループと、そうではなく、より厳しい緊張感や対立関係が育まれたという、二つに分かれると思っています。

こういうことです、というのを、次のシートで補足しながらご説明しますと、コロナ禍におけるひきこもり①、と書いてありますが、世界と社会が私を包摂して問題は希薄化するということです。つまりコロナ禍以前は、世界・社会から私が、左側に退避や避難をしてひきこもり状態になっているということで、私と私以外が、対極的な生活をしているという認識・意識をするのです。

ところが、私たち自身も外出しない、在宅ワークになってくる中で、世界や社会も、ひきこもりに準じるような生活経験をしたと思われます。そういう意味では、「コロナ禍の自粛生活」というものが、「差異・異端・少数派の一時的緩和とひきこもり体験の共有」が図れた、という言い方もできるのではないか。これをまたさらに、この下の方を、さらに見てみると、コロナ禍の中で世界や社会、ひきこもっている私以外も、ひきこもりを、「準ひきこもり」の状態になるという経験をした中で、ご家族がひきこもりの疑似体験、実は準ひきこもり的な状態になっておりますが、自分の子どものひきこもりというのはこういうことなのかということを、自分の経験を通して理解が、進んでいく保護者の方々が一部います。

ところが、もう一部右側ですが、お父さんお母さん方がやはり在宅ワークや外出ができない云々で、そこに非常にストレスがたまり、フラストレーションが蓄積されていくと、その家族関係がより緊張・対立関係を増していき、ご本人に対して厳しく当たってしまう、ということがあるように思います。これは、私が横浜市の南区で、行っている繋がるカフェのメンバーたち、或いはオンラインでのご本人の相談やご家族の相談を通しての臨床上のアンケート云々ではなく、臨床上の印象として、まとめたものです。

本協議会で取り組む令和４・５年期のテーマにも即して、また国の取り組みも、調査結果も取り入れながら神奈川では何ができるのかといことを、神奈川の先進性や、神奈川の地域密着性など、或いは神奈川の当事者家族発信みたいなところを、オンライン、或いは対面、つまり、この協議会でいうと、リアルとバーチャルという言葉で表現されていますが、そうした神奈川ならではの構想ができないかな、と思っているところです。

このように、最後まとめましたが、ひきこもりの特性と、このコロナ禍の支援経験を踏まえて、やはり対面とオンラインの複線的支援の実施についての検討が、豊かに取り組まれる時代を迎えていると思っています。

ひきこもりだからこそ、オンラインといったことが注目されがちだと思うのです。これが統合失調症や、不登校など、様々な、例えば重度の特定疾患の方々など、そうした方々の、また支援に対しても、このひきこもりのリアルとバーチャルの支援、複線的支援のあり方が、大きな影響を与えていくのではないかと、思っているところです。

簡単ですが私のプレゼンこれでおしまいにさせてもらいます。ありがとうございました。

○長谷川部会長

さて、蟇田委員と長谷川のプレゼンをさせてもらいましたが、ご質問或いは意見交換の時間にしたいと思います。ここからも自由にフリーディスカッションしたいと思いますので、挙手いただきご発言をいただけたらと思います。

牧野委員、お願いします。

○牧野委員

とても興味深いご報告ありがとうございました。実は私たちはこの３年間で、大学で教えるというか学生と繋がることにおいて、最初２年間は完全にオンラインでした。対面の授業は全くなく、オンラインでやってきて、今年度少し対面に戻しながら、ということで、大変ですが一応ハイブリッドでやっていますが、また対面への圧力が結構かかってきており、でもそれを拒否しながらハイブリッドでやろうかと思っています。

実はこの２～３年間の経験で、例えば、オンラインで始めたけれど、最初学生たちは馴染まず、嫌がっていた学生たちがいましたし、２年間キャンパスに一度も来たことがないという学生が出たりして、思っていたようなキャンパスライフが送れず、とてもかわいそうだと思いました。特に私たちは、いわゆる教養課程と専門課程でキャンパスが違うので、専門課程のキャンパスに入らないまま卒業し、また、就活も全部オンラインで行い、就職した後で不適応になる学生が結構いました。

新たな発見だったのは、逆に今までひきこもりがちでゼミに出席できなかった学生たちが、オンラインで参加をして、顔出しをして発言までする。私たちも気になって仕方がないので、大丈夫なのかと話しかけると、「二次元平面」なら大丈夫です、と言われ、そうか二次元平面かと思ってびっくりしたのですが、そのあと彼らが言い始めたのが、私たち教員が一生懸命関わりをもとうとして、彼らを引き出そうとしたことに対して、ありがたいと思いながら出られませんでしたと言うのですが、その時に、一言言いたいことがあると言われて、言われた言葉がちょっとショックでした。「先生方は、私たちに関わりを持って、ひきこもりから出そうとしてくださったが、その時に、対面の暴力性ってことを考えたことがありますか」と。びっくりしました。とにかくもう怖い、顔を見て目を見てなんてことは、とてもではないけど、もう勘弁して欲しいと。それで、今回オンラインになって、二次元平面だけれども、顔出しして、発言ができて、他の生徒も交流ができてとても嬉しい、と言うのです。

そこで、私たちもオンラインで授業をやっているうちに考え方が変わってきて、今まで彼らに来てもらおうと思ってきたのですが、これから彼らの方に、その日常生活の中に置かれている二次元平面の中に、我々がお邪魔できるのではないか、と思い始めました。

そうすると、教え方も少しずつ変わってきて、むしろ彼らの日常生活の中に私たちが組み込まれていくという形で繋がるということは可能なのかどうか、などと思いをめぐらせています。

そこに先ほどの蟇田委員がおっしゃったような支援の仕方が組み込まれていくことによって、彼らが自立を考えていき、もっと言えば、ネット上・オンライン上で様々な仕事をこなせるようになっていくなど、そういう社会にもなっていく面があるのではないかと思いました。

それが一つです。それからもう一つは、ここのところのいろいろな、例えば東京都の中学３年生の進学希望調査が先日発表されましたが、初めて、全日制希望が９割を切って、これ愛知県も実は１％～２％減ってきていて、従来の全日制希望者がどこにいくかというと、通信制なのです。

私のつき合いがある不登校の子たちも小学生ですが、彼らも勉強は好きだけど学校には行きたくないと言っていて、この２～３年のコロナの中で、オンラインで繋がることや、そこで勉強することを覚えた子たちが、もう積極的に学校に行かないという選択を始めているような感じを受けるときがあります。そうすると、従来の社会のあり方が少しずつ組み替えられていき、そこにまた彼らは新しい繋がり方を見出すのではないか。オンラインで繋がりながら、実は勉強もしておりますが、学校に行く時間を、例えばその子たちはパフォーマンスアートの方に関わっていて、身体表現を一生懸命やったりするようになり、大人の中で表現活動を始めたりしている子どもたちが出てきています。

そういう意味では、新しい生活や新しい繋がり方の中で、従来の、例えば年齢を区切った学年制による学校など、効率性がよかったわけですが、そうではない社会に入りつつあるような感じもしています。

そこに先ほどの育て上げネットのご報告や、長谷川委員がおっしゃったような支援の仕方など、

関わる中で、或いはひきこもりとして分けてきたものが、グラデーションを持って繋がっていくような社会に入っていくのかな、と思います。

このように考えますと、今回ひきこもり支援ということですが、むしろそれを通して私たちのあり方そのものも変えていく、ということを考えていく。そうすると新しい社会のあり方が少しずつ見え、そのように繋がるのではないかと思いました。感想みたいな話で申し訳ありませんが、期待をしたいと思っていますので、また是非いろいろお教えください。ありがとうございます。

○長谷川部会長

牧野委員ありがとうございました。

会議は、10 分位延長させてもらってもいいですか。

では、他の委員の方からも、感想やご意見いただけたらと思います。

○西野委員

感想になりますが、悶々とするのです。夢パークや私たちが遊びの持っている意味など、それを前面に押し出してリアルに子どもたちが遊びを通して学び育つという現場を、大事にしてきた人間からすると、どんどんバーチャル化していくことへの何となく抵抗感みたいなものを持っています。

４・５年期の協議テーマが、「リアルとバーチャルの最適な組合わせによる居場所及び自己肯定感を育む支援のあり方」とありますが、この間、藤沢市の市長もいらっしゃる講演会に呼ばれましたが、そこにソフト会社の業者が売り込みに来ていて、是非繋がらせてくださいということでした。

そういう時代になっていくのだと、まさに、今日の資料にもあるようなメタバースなどオンライン上で参加して、これで学校も出席になり、そこで勉強もでき、議論も相談もできるという、何か、そっちに向かっていくのというのを、少し悶々としているところです。つまり、もやもやしていることを整理するのに、ぜひ今回・次年度と、楽しみにと思っています。

特に先ほど、長谷川部会長が厚労省の仕事をされているこの調査の発表が、どうなるかとても楽しみに思っています。また、蟇田委員が語ってくれたことは、すごく興味があります。

すごいレベルまできていて、確かに、日常のひきこもりの若者たちはこれに入っていく、と思いました。

そうするとし、いわゆるひきこもり問題という問題はどこにあるのか、となります。一つの生き方として、十分新しい地平が見えつつあるというのがあって、バーチャルな世界と、リアルな世界がどうマッチングしていく社会を作っていけるかというのが、僕らの大きな課題だと感じていました。

○長谷川部会長

ありがとうございます。私たちのモヤモヤを、議論していきたいなというに思います。

続いて、尾崎委員よろしくお願いします。

○尾崎委員

これまでの協議会の中で、自立とは何なのだろうとことを議論してきたと思うのですが、今日のお話も、働くことや社会参加というのは、今までだったら、会社で勤めて、生活するというところ

が、皆の共通のイメージだったのが、これから先変わっていくのだと、それが一つのあり方としては、オンラインやメタバースで収入を得て生活をしていくといようなことも、きっとこの先現実になっていくのだというのを、お話を伺いながら感じました。

また、先ほど牧野委員のおっしゃっていた、日常生活にどう組み込まれていくのかということを、私たちの側がこれからチャレンジしていかないといけない、というところで、ずっと高校の中の居場所のカフェという事業をやってきたというのは、高校が彼らの日常生活の場であって、そこに、自分たちで入っていく、そこの施設で待っているのではなく、生活の中に入っていく一つのやり方だったというところで、それがオンラインという場を通して、新しくやっていけるのではないか、というのを私も、今後の取り組みとして、とても参考になると、それをどうやって自分たちがやっていけるのかなということを考えながら聞いておりました。最後今、西野委員がおっしゃっていた遊びを通してとか、その実際の場の体験を、今まで大事にしてきたところを、この先どうしていくのだろうということについても、遊びというのは、その目的が決まっておらず、居場所などもそうだと思いますが、まず目的なく集まれる場を作っていって、無目的で集まった中で、自分が何をしたいのか、何ができるのか。ということに気づき、行動していくという場を作ってきたのが、居場所づくりなどのような活動なのかと考えると、やはりオンラインでその無目的な場を作ることの難しさを自分自身は感じています。このＺＯＯＭでの会議でも、目的を持って発言をしなければならず、なかなか雑談が難しく、自分の経験としてはそういうところがありました。でも、オンラインの中でも、目的を明確にしなくても、居られる場があったらいいのだろうと思いますし、そういう場づくりを、どのようにやっていけるのかということを、今後の議論の中でも皆さんと意見交換したいと思いました。以上です。

○長谷川部会長

尾崎委員ありがとうございます。限られた時間ですけどご発言いただける方がいらっしゃいましたらお願いいたします。

これはまた、今後の部会の中で、議論すべきテーマでもありますので、ここで何か方向性が出るとかいうことではございませんので、よろしいでしょうか。

○長谷川部会長

それでは続いて議題の２その他について、事務局からご報告お願いいたします。

○企画グループリーダー

（参考資料を基に説明）

○長谷川部会長

ありがとうございます。昨夕送っていただいた資料なのでまたご覧になられてない方もいらっしゃるかもしれません。確定数字が入っているので、またご覧いただきたいと思います。

何かご質問がございましたらお受けしたいと思いますがいかがですか。

では、特にないということにさせていただきます。

これで議題を終わります。ありがとうございます。最後に、事務局からお願いいたします。

○青少年課長

皆様ありがとうございました。

次回の企画調整部会は、５月頃をめどに開催させていただきたいと思います。こちらも、また近くなりましたら、追ってメール等でご照会させていただきますので、よろしくお願いします。

本日皆さんからいただいた貴重なお話から、我々がこれから進めようとしてるそのメタバースを使った事業などにも、取り入れていきたいと思いますので、引き続きご議論の方よろしくお願いしたいと思います。

本日は誠にありがとうございました。

以上